

近代沖縄文学の展開



仲程昌徳

仲
程
昌
德

一九四三年 南洋デニアン島カオリナスで生まれる。
一九六七年 琉球大学文学部国語国文学科卒業。
一九七四年 法政大学大学院人文科学研究科日本文学専攻修士課程修了。
一九七三年 琉球大学法文学部文学科助手となる。
現在 琉球大学教養部助教授。
主著書 『南島抒情―琉歌百選』(共著)角川書店
『山之口貌―詩とその軌跡』法政大学出版局。
『南島歌謡大成 沖繩編下』(共編)角川書店。

近代沖繩文学の展開

一九八一年一月三十日 第一版第一刷発行

著 者 仲 程 昌 德

発行者 竹 村 一 一
◎一九八一年

発行所 株式会社 三一 書 房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話 ○三(二九一)三三三番
振替 東京 九一八四一六〇番
郵便番号 一〇一

印刷所 株式会社 栄泰印刷
製本所 東京 美術紙工
落丁・乱丁本はおとりかえいたします

近代沖縄文学の展開

目次

I 戦争と文学……………五

1 沖繩の戦記文学……………六

2 沖繩の戦記・方法と視点……………二八

——曾野綾子の作品を中心にして

3 「神話」「幻」を超えて……………四〇

II 言葉と文学……………五三

1 文学作品における沖繩の言葉……………五五

——その動向と展開

2 言葉のかげ……………六九

——沖繩をうたった二つの詩集から

3 共通語の浸透と歌劇の周辺……………八三

——沖繩と近代

III 文学と地域性……………九一

1 大城立裕・その文化論の特質……………九三

2 短篇小説の図式……………九六

——『ばなりぬすま幻想』をめぐって

IV 状況と文学

3	現実と夢との深みで	101
	——東峰夫「オキナワの少年」について	
4	古代から・戦後から	113
	——沖縄の現代詩	
5	沖縄・琉歌の発生とその現在	113
6	インフェリオリティ・コンプレックスからアイデンティティーへ	115
	——「金城朝永」私論	
7	末吉麦門冬の手紙	115
8	喪失と獲得	115
	——地域への視点	
	IV 状況と文学	115
1	1976年の文学	116
2	1978年の文学	117
3	1979年の文学	118
4	本土作家と離島	119
	(1) 安岡章太郎「離島にて」にふれて	119
	(2) 文学作品の中の沖縄女性像	121
	(3) 「漂浪」の奥処	124

V 山之口貌の詩と小説 一七

1 山之口貌の詩 一六

2 『抒情詩』への投稿詩 二〇

3 “長い随筆”の中の貌 二四

——自伝小説と詩との関係について

4 山之口貌の小説 三〇

初稿発表誌一覧 二三

あとがき 二五

I
戦争と文学

1 沖繩の戦記文学

1

『沖繩縣史』第9巻各論編8は、沖繩戦記録1として、中部から南部にかけての一六市町村四一箇所での一般庶民の戦争体験談を特集してある。

体験談は、それぞれの区域で、四、五名による座談会形式をもつてなされ、テープに録音し、そのテープを宮城聰、星雅彦両氏が分担し、活字化している。

座談会に参加した人々はざっと四〇〇名、その中で、半数の体験談は割愛され、残り二〇〇名余の体験談が記録され、「沖繩戦記録1」⁽¹⁾として刊行されたわけである。

最初の座談会が、旧喜屋武村字喜屋武で開かれた一九六七（昭和四二）年一月二十九日は、終戦の日から、二二年と二カ月がたっている。

一人の人間の生涯における年月の経過としては、そう短い期間ではないであろう。

たとえようもない悪夢のような光景から二〇年以上もたって、一応、心の平穏を取り戻したと思われる頃、傷つきながら生きのびてきた人々に、その光景を語ってもらうという残酷極まりないことを、なぜ、あえて企図しなければならなかったのでしょうか。

また、「座談会への出席を何度頼んでも拒みつつけて、最後まで承諾を求められな」⁽²⁾かった幾名かの人々を別にして、

多くの人々が、この企画に参加したという理由は、いったいどこにあったのだろうか。

たとえば、「一家全滅二百七十戸の四十七%に達し、(中略)一人しか生き残っていない戸数を加えると、六、七十%に達する」(約二百七十戸、千五百人中犠牲者千二百人を越す)と思われる米須部落(旧摩文仁村)について、ある程度は知られていても、あらためて聞く場合、あるいは話す場合、異常な努力が必要であったと思われるからである。

米須部落に関するようなことばかりではないにしても、一個人の内部に深く秘されていた闇の部分は、そう簡単に、被いを取り去ることのできるものではなかったであろう。

夜な夜な悪夢にうなされる。そして、それは一人で耐えなければならない。その一人で耐えざるを得ない毎日は、痛ましいが故に、ついに語ることを忘れて黙りこんでしまっていたというようなこと。また、戦後の混乱の中を生き抜くためには、あえて忘れ去らねばならぬと意志して黙ってしまったというようなこと。

そのような痛ましい長い年月の沈黙を、あえて破らざるを得なかった切迫した事情があったとすれば、それは、恐らく、一言につきるのではなからうか。

その一言が、どれほど重いものをひきずってなされるかを明らかにするために、「一七(一九四二)年の一月に召集され、二一年の十二月」外地から引き揚げ「沖繩の戦争は大変だったな、われわれ外地で聞いたり、予想したよりは、遙かに凄かったなという感じを受け」た一人の男と、その母との「満五年」ぶりの対面の部分を、ここに引用しておくことも、あなたがち無駄なことではないであろう。

わたくしは、覚悟している気持ちを崩してはいけなと、心をおさえて母に向かいました。そうしてわたしからおふくろの顔を見た場合、抱きついて来るでもなく、堪らないらしく涙は流してはいますが、近づかず、いかにも、すまない、申訳けない、といった心の中がよくわかったんですね。お父さんも亡くした、兄さんの五人の子も亡くした、お前の子供も亡くした、妹も亡くした、嫁も二人亡くしてしまった、それだのに自分は生きている、それは自分が悪かった、と考えているような母の心でした。母は、それを言い出そうとしました。

「お母さん、そんなことを今更言うべきではない、わかっています。お母さんが生きていられてよかった、こんな嬉

しいことはない。」

わたしは、ここで涙を流してはいけないと勇気を出して心を支えることに努めましたらおふくろは、「元氣であつたな」とぼつんといっていました。それは今あつて、わたしが元氣であつたことをはじめて知つたという意味ではありません。わたしへの胸いっぱいの愛情の表現だつたんでしょね。

ここに、外地から引き揚げてきてみると「母ひとりだけ助かつて、十人の家族が全滅して」いたという、なんとも言いようのない悲劇を、いかに耐えようかと苦心している一人の男の姿が、悲しみの姿そのままの母を前にして語られている。そこには、突き上げてくるような怒りの調子はない。あるのは、お互いを庇いあおうとする、底の知れないやさしさとしか言いようのないものである。悲惨な結果に耐えようとして勇気をふるいたたせている姿である。

なぜ、悲惨な戦争にまきこまれなければならなかったのか。それを考える前に、現実の様相に打ちのめされず立ちあがるための、無言の勇気を確認しあっている、親子対面の場面である。

長い沈黙の始まりが、そこにある。『沖繩縣史』第9巻各論編8、沖繩戦記録1を読んでいくと、そのような場面にくつとなく出くわす。

果々と重なつた死体の山を目の前にして、一般庶民のとり得た唯一の態度が、「そんなことを今更言うべきではない、わかつてい」る、というような言葉であつたということは、それだけに、沈黙の領域を広いものにしていった証左ともなるであろう。そして、それはまた、年老いていった人々に、それ以上悲痛な思いをさせたくないという息子等のやさしい心づかいでもあつたのである。

しかし、そのやさしい心づかいが、真に美しいものとなって輝くためには、沈黙は破らなければならなかつたはずである。

終戦後、二〇年以上も過ぎ去つた時点での回想ということになると——特にそれが、悲惨極まりなかつた過去ということになると、いきおい語り手の自己抑制が要求されるわけであるが、一般庶民の戦争体験談は抑制の上の抑制であり、また、たとえ雑多な潤色が多々あつたと考えられようとも、底にあるものは見失われていないと言えるであろう。なぜな

ら、どういふ風に語ろうとも「戦争というものはやってはいけな⁽⁴⁾いと、子供たちにもいたかった」ということを忘れてはいないのだから。それは、ふくらみを増しこそすれ、失われてはいないのである。

「戦争というものはやってはいけない」、その一言のためにのみ、やっとの思いで生きのびた人々は語っている。

2

戦後二六年もたつて、戦争の爪痕などあとかたもなく消え去つたのに、一般庶民の戦争体験談が、なぜ公にされなければならなかったのか。あらためてそう問いかえしつゝ、それがなされなければならなかった必然的な理由について考えてみたい。

深い憂いが日本人の胸奥をとらえはじめている。それは、戦後のさまざまな民主的改革が陰に陽にはばまれ逆転させられはじめて、日々のわたしたちの生活も社会生活の全体もが一種言いようもない低迷とせめぎ合いの中に入ってきているためばかりではない。それとわかちがたく結びついて、ふたたび戦争の挑発される濃厚な危険が、——やっど平和になって、傷つき疲れた生活と魂とに人間らしい明日への希望と可能とが開かれはじめてからまだわずか四年にしかないのでないというのに、⁽⁵⁾ またも戦争のキナ臭い匂いが漂いはじめているのだ。日本人はどうなるのであろう？

『日本戦歿学生の手記』に附して」として、『きけわだつみのこえ』の解説の最初に、小田切秀雄氏は右のように書いている。

科学の精髓を尽した圧倒的な物量の前で、貧困な魂だけを強調したたかいがどうなっていくか知っていて、あえて銃を取った学徒たちの、検閲や古年次兵たちを意識しながらの最後の文字は、良識ある人々の哀惜の念と、暗い予感とによってまとめられたわけであるが、その暗い予感を、たんなる杞憂だとして無視することのできる者は少ないであろう。「やっど平和になって、傷つき疲れた生活と魂とに人間らしい明日への希望と可能とが開かれはじめてからまだわずか四年にしかなくなっていないというのに、⁽⁶⁾ またも戦争のキナ臭い匂いが漂いはじめている」という、小田切秀雄氏の言葉を裏付けるかの如く、一九四九（昭和二四）年七月一日には、「米一九五〇会計年度予算に、沖縄軍事施設建設費五〇〇〇万ドルを

計上」すると発表され、「基地建設本格化への始動」⁽⁶⁾が、沖縄で始まったのである。

それは、まさしく「不幸にして、日本国憲法の民主主義・平和主義の健全な成長」が「いくばくも年月を経過しないうちに大きな壁につき当るにいたった」⁽⁷⁾ことを明示するものである。

一九四九年は、中国共産党が、中華人民共和国を成立させた年である。家永三郎氏は、それにふれて、大きな犠牲をはらって獲得した新しい国家体制が、共産圏の強大化にともなって、「反共軍事政策を重視する人たちのヘゲモニーの下で、日本の民主化・非軍事化政策の一八〇度の転換が進められ、日本をアメリカのアジア反共軍事戦略の一環として再編成する政策がとられ（中略）日本の再軍備が進められ」ていく危惧すべき道への踏みだしを明らかにしている。

反ファシズム政策から反共世界戦略への強行は、解放が一時の幻想であったことを教えたばかりでなく、もっとも悲惨な体験を強いられた沖縄が、再び戦略基地として生贄にされていく過程でもあったのである。それは、「一九五一（昭和二六）年に調印され翌年発効した対日平和条約（サンフランシスコ条約）」と同時に締結された日米安全保障条約により、アメリカが沖縄を半永久的に軍事基地として支配し、日本本土にも米軍を駐在させて、日本列島を極東におけるアメリカの反共軍事前進基地として利用する体制が成立した」⁽⁹⁾ことでもはっきり示されている。

沖縄が「半永久的に軍事基地」化していく過程は、およそ、次のようなごく大まかな基地設置・機能の展開を取り出しただけの年表をみても明らかであろう。

- 一九五五（昭和三〇）年 原子砲陸揚げ。
- 一九五六（昭和三一）年 ナイキ基地建設計画発表（八カ所、工費一〇〇〇万ドル）。
- 一九六〇（昭和三五）年 高等弁務官、八カ所のミサイル・ホーク基地の建設を発表。
- 一九六一（昭和三六）年 米空軍、四カ所のメースB基地建設を発表。
- 一九六二（昭和三七）年 ミサイルの実射演習を開始。メースB基地完成。
- 一九六四（昭和三九）年 在沖縄米軍司令部、クイック・リリン（緊急発進）とよばれる演習を行なうと発表。
- 一九六五（昭和四〇）年 在沖縄海兵隊の航空ミサイル大隊（ホーク・ミサイルを装備）南ヴェトナムのダナンに到着。空軍、沖

繩に航空機とミサイル攻撃を探知・識別する新型自動警報地下装置を建設すると発表。沖縄、嘉手納基地へ台風避難のB⁽²⁾50、南ウェトナム解放区へ渡洋爆撃。

一九六八（昭和四三）年 B 52 嘉手納基地へ飛来（以後常駐化）。

一九七〇（昭和四五）年 米空軍超大型輸送機C 5 Aギャラクシー嘉手納、横田へ飛来。三沢と横田のファントム戦闘爆撃機一〇八機七二年六月までに韓国と嘉手納に半数ずつ駐在との方針明らかになる。

一九七一（昭和四六）年 嘉手納を中継基地（ステッピング・ストーン）に米韓合同の大空輪演習（フリーダム・ボルト作戦）実施。横田のF 4 Cファントム（三個中隊五四機）沖縄移駐を開始。⁽¹⁰⁾

その他、いつ持ち込まれたのか解らないような毒ガスや、また、突然那覇の港に姿をみせた原子力潜水艦等とあるわけで、右の表をみていくと住民の意志と関わりなくどんどん基地化・準戦場化しつつある沖縄の姿が、手に取るようにわかるはずである。

勿論、住民は、ただ手をこまねいてそれらをみていたわけではない。常に反対闘争のあけくだったとも言える。しかし、住民の意志を無視するかの如く、基地化は休まず進行していたのである。

日米安全保障条約が、その後、どういう役割を果たしてきたか、朝鮮、ウェトナム問題をみれば自らあきらかになるというものであるが、恐らく、そういう暗い歩みへの予感も含めて、もっとも早い時期に、小田切秀雄氏はあらたなる危機を予見していたのである。「不法な戦争の共同遂行者」として、またしても住民に犠牲を強いる悲劇への傾斜を、どうしても阻止するためには、過去の遺産を公開することが一つの有効な手段であることは自明であり、戦没学徒の手記を発刊する意義もそこにあったのである。そして、それにもまして、もっとも不法な犠牲を強いられた一般庶民の戦争体験談を公表することは重要であり、急激に基地化、戦場化していく今日、絶対に必要なものであったと言えるであらう。

3

新たなる危機感が人々の心をよぎりはじめた時、かつての「二十万同胞の犠牲」を無駄にしないため、傷つきながら生

き残った一般庶民は、過去の痛みを責任を持って語りはじめた。

それが、不穏な流れに抗する砦ともなり得る「戦争体験談」となって、戦後二六年めに集大成されるわけだが、戦後いち早く、捕虜にもならず飢餓線上をさまよった一避難民の「住民の手記」⁽¹¹⁾が、「沖繩住民が、この戦争において、いかに苦しんだか、また、戦争がもたらしたものは、何であったかを、有りのままに、うったえたい」意図をもって上梓された『鉄の暴風』第七章に入っている。

『鉄の暴風』は、七章からなっていて、一章から六章までは「当時一県一紙の新聞紙として、あらゆる戦争の困苦と戦いながら、壕中で新聞発行の使命に生きた、旧沖繩新報社社員」が、「戦場であって、つぶさに目撃体験した、苛烈な戦争の実相を、世の人々に報告すべき責務を痛感し」出版されたもので、いわば、記者の眼でもってとらえられた「沖繩戦記」である。

そこには、克明に沖繩戦の開始から終焉までが記されている。また附録として「戦闘経過概要」がついていて、沖繩が今次の大戦でどれだけ多くの犠牲をはらわなければならなかったか、よくわかるように説明されている。

それによると、「沖繩住民の戦死者数は確実なものだけで極く内輪に見て」「一般人四七、一八四人、現役兵四、五七五人、応召兵八三六人、防衛兵五、〇一九人、勤皇隊七〇八人、護郷隊一六人、計六二、三三八人」となっている。しかし、そこには「女学生の戦死者も餓死者、栄養失調による病死者も計算されておらず、また鉄血勤皇隊以外の学生隊の戦死者もあり」、その「数字は甚だ大まかなもので、実数は、十万をはるかに越える」と見られている⁽¹²⁾とある。

一〇万人を越えるこのような犠牲者が、どうしてでてきたかということは、小さな島が直接戦場になったということもあるが、それよりもっと大きな原因として、教育の画一化という問題が手伝っていたことはよく知られていることである。

「公教育を中央政府の手に掌握して国民思想を画一化しようというアイデアは、絶対主義天皇制国家の確立過程で初めて形成されたものである」⁽¹³⁾わけだが、そのアイデアがもっとも威力をふるうのは、文化の先進地域より、後進地域であることはまず間違いない。沖繩は、いわばその好見本であったと言えるであろう。

一九四〇（昭和一五）年に起こった、日本民芸協会同人と沖縄県学務部との間の「標準語論争」⁽¹⁶⁾（方言論争）は、みごとにそれを実証するものである。

外間守善氏は、その論争の展開を追いながら、「標準語教育を徹底させようとした県治方針の根源を追いつめていくと、後進性を払拭しようとする『沖縄』自身の主体性と、中央からの国家主義の滲透という二つの面にぶつからざるを得ないとし、『太平洋戦争における若者たちを含む沖縄の悲劇』は、「宿命的に背負って来た後進性から脱却」しようとする早急な焦慮が、滅私奉公・一死報国の皇民化思想をまもり、国家主義を完遂しようとした「中央に対する批判力」を失わせたところに大きな原因があったと指摘する。

また、大田昌秀氏は、「置県以来、沖縄での教育、（中略）はもっぱら皇民化のみを教育の名で行ってきたといっても言い過ぎではない」と考え、それが、日露戦争当時「戦死者が多くなればなるほど、沖縄も日本帝国の一部なることを証しすることになると信じこんでいた」⁽¹⁹⁾過去の歴史に眼を向けると同時に、今次の大戦で「沖縄県民が（中略）苛酷きわまる戦闘に積極的に協力したのは、彼等が長年同胞から『異民族であるかのようにあつかわれ』『差別意識』に悩んでいたところから、『身をもって国に殉ずる』ことにより『忠良なる帝国臣民であることを身をもってあかしする格好の機会』と考えた」⁽²⁰⁾かわりない沖縄の悲劇のくりかえしをみている。

このように、歴史の後進性、差別意識を克服するため中央と一体化しようとする配慮は——現今、またもや一体化しようとする運動が叫ばれているわけだが、不当に扱われ続けてきた地域であればあるほど激烈になっていったわけであり、本土の一部農村出身の者が、軍隊をありがたがったような意識⁽²²⁾とは違っていたのである。

外間守善、大田昌秀両氏の指摘は、また、中央画一化教育に無批判で追従させ、陰惨な戦闘にひきこんでいった責任の問題を、等閑に付せないものとして含んでいるように思われる。

たとえば、これは『鉄の暴風』の内容とは問題を別にするものであるが、編纂意図を述べた一節に、「あらゆる戦争の困苦と戦いながら、壕中で新聞発行の使命に生きた」（傍点引用者）という箇所がある。

米軍が上陸してから二カ月近くも「深夜の壕で鳴りつづけた印刷機」が、いったい、どんな内容のものを刷っていたの

か。勿論、当時において、事実・真実の情報を伝えるための記者の良心は、一九三七（昭和一二）年の「時局ニ関スル記事取扱イ方ニ関スル件」をはじめとし、一九四一（昭和一六）年の「記事差し止め事項」等によって首根っこを差し押さえられたようなものであったわけであり、そのような中での「使命」が、およそどういう内容を持つものであったか推測するに難くないからである。

それは、また『沖繩の悲劇』の著者、仲宗根政善氏をも含めて、当時の上層に位置していた人々の、いわば、二重の悲劇という複雑な様相を呈示している問題でもある。

しかし戦時下において、報道の役割を受持った記者や、教育者の意識のありようは問題になったとしても、戦後出版された『鉄の暴風』『沖繩の悲劇』の評価が変わるというようなことはない。

『鉄の暴風』が、沖繩戦の開始から終焉までの記録であることは前述した通りであるが、それを受ける格好で「戦火が終息し、島内至るところ無数の壕から幽鬼のような姿で地上に現われた生き残りの住民が、占領米軍の支配のもと、虚脱から立ち上り、地上に再び秩序と人間社会を築き上げるまでの、困難、混沌、錯誤、低迷と闘いながら營々と歩んできた軌跡を克明に忠実に記録し」た『沖繩の証言——激動の25年誌——上』⁽²³⁾が発行されたことは、忘れていけないことの一つであらう。『沖繩の証言』は、紙上連載されたものであり、それはまだ終わっているわけではない。これからでなくてはいろいろな真実の証言が、逆流しようとする体制への痛烈な批判にもなり得るものであることは、今まで連載され上巻としてまとめて上梓された一巻をみても明らかである。

また、一九五〇（昭和二五）年の初版発行から二〇〇年たった一九七〇（昭和四五）年に、『鉄の暴風』は、「戦後の若い世代は勿論、二十年の歳月は、沖繩人が陥ったあの狂乱怒濤時代を知らぬ人たちとの間には一種の断絶さえつくろうとしている。七二年復帰を控えて、あえてこの記録を再上梓する」として「内容を一切元のまま、むしろ復刻の形で」再刊されたことをつけ加えておきたい。